

郷土博物館・文学館だより



渋谷城の想像模型



企画展

「渋谷に残された伝説」

が開催されました

渋谷は現在、大規模な再開発の真っ最中で、次から次へと新しいビルが完成しています。そんな渋谷の街にも古くからの伝説が息づいています。

昨年10月22日から今年1月13日まで行われた展示では、「旗洗池」など源氏の武将にまつわる伝説や「道玄坂」の伝説、そして近代に生まれた「人喰い松」の伝説など、数多くの渋谷の伝説を紹介しました。

源経基のものと伝えられる筍（こうがい）や渋谷城の模型など、伝説ゆかりの資料に、来館者の皆さんは興味深そうに見入っていました。



11月2日の展示解説の様子

渋谷の地質

現在、渋谷駅周辺は再開発が進行中です。工事の中心は、渋谷駅をはさんで東側から西側に移りましたが、現場では大型重機が行き来し、大量の土砂を動かしています。都会では舗装などで土を見る機会が少なくなりましたが、こうした土木工事に出会うと、改めて建物は土の上に建っていると再認識することができます。今回は、渋谷の地質についてお話ししましょう。

渋谷は5つの台地（北から幡ヶ谷・千駄ヶ谷・代々木・東渋谷・西渋谷台地）から成り立っています。この台地は、何層もの地層が重なってできていて、まず表土には地表面から約50cmの厚さの黒土があります。その下に、関東ローム層、いわゆる赤土とよばれている土層とローム質粘土層が続きます。両者を合わせると、おおよそ10~13mぐらいの厚さになります。

関東ローム層は、厚さ約3mの立川ローム層と約4mの武蔵野ローム層にわかれます。立川ローム層は、古富士山もしくは現在の富士山が火山灰を降らせて堆積したものです。立川ローム層の下限で、今から約3万年前になります。

その下にある武蔵野ローム層は、箱根火山と富士火山の活動による火山灰で形成されたものと考えられています。武蔵野ローム層の下限付近で、今から約6万年前になります。さらにその下に、箱根火山の噴火による黄色い軽石（浮石ともいう）層が5~10cm堆積しています。

続いてその下にある土層が、ローム質粘土層です。これも、箱根や富士方面の火山活動に伴って降った火山灰によってできました。東京23区付近はこの頃浅海で、降った火山灰が海中に

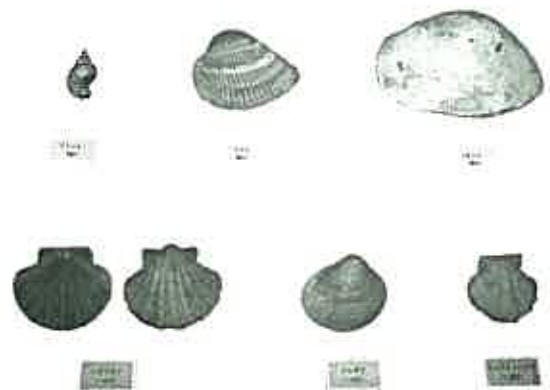
堆積した関係で粘土化したようです。渋谷・目黒・世田谷・新宿・港区一帯では、この地層を「渋谷粘土層」と呼んでいます。一方、横浜方面はこの時すでに陸地化していたため下末吉ローム層を形成しました。一番下限で、約12~13万年前の地層となります。

次の下の層は、上部東京層といえます。土地が沈降し東京湾が形成され、そこに土砂が流れて堆積してできた地層です。砂と粘土・シルトからなる地層には貝化石が多く含まれ、渋谷付近も海面下であったことを示しています。

さらにその下が、東京礫層になります。当時渋谷付近は海面下で、西方の山地から流れてきた砂礫が堆積し、三角州を形成したものが礫層になりました。厚さは数メートルを測り、超高層ビルや東京タワーの基礎はこの東京礫層を支持基盤にして、建築されているそうです。

この礫層の下は再び、陸地から運ばれた土砂が堆積した下部東京層へと続き、上部東京層・東京礫層・下部東京層は、合せて下末吉層ともよばれています。

このように渋谷の地面の下は、いくつもの地層が重なり合って地盤ができています。



上部東京層から出てきた貝化石



渋谷で暮らした北原白秋

北原白秋(本名・隆吉)は明治18年(1885)、福岡県山門郡沖端村(現・柳川市沖端町)に生まれました。県立中学校伝習館に在学中の15歳頃から文学に関心を持ち始め、島崎藤村『若菜集』を愛読したほか、東京新詩社の機関誌『明星』にも注目していたそうです。白秋は卒業直前の37年に中学校を退学し、母と弟の助力を得て上京、早稲田大学英文科予科に入学します。当時「射水」の号を用いた白秋は、同級生の若山牧水・中村蘇水と共に「早稲田の三水」と称されました。また同年より『明星』に自作を投稿し、10月に短歌6首が掲載されました。

39年に、白秋は与謝野鉄幹の招きに応じて新詩社の社友になりました。新詩社では「紅き実」「高機(たかはた)」などの詩を発表したほか、40年6月には短歌の競技制作に参加し「青の馬御すと来りぬ世に一の真大膽子(またいたんこ)の大气の童」などの短歌を62首発表します。また鉄幹の案内で、吉井勇や平野万里などの若き社友たちと共に、近畿地方や九州地方を旅する機会に恵まれましたが、この体験は白秋の第一詩集『邪宗門』に収録された詩「青き花」などを創作する契機となりました。

白秋は新詩社で自身の才能を大いに発揮しましたが、41年1月、白秋を含む新詩社の社友7名が揃って脱退する事件が起こります。その後『明星』は急速に力を失い、同年発刊の100号をもって終刊となりました。白秋と鉄幹の親交は断絶されたかに思われますが、翌年に森鷗

外の助力を得て創刊され、白秋も主要人物の一人として詩歌を発表した雑誌『スバル』に、鉄幹が外部執筆者として参加したり、大正10年(1921)に『(第二次)明星』が創刊された際、白秋は同誌に詩「落葉松(からまつ)」を発表していることから、新詩社脱退後、白秋と鉄幹の交流は復活したと考えられます。

白秋は明治40年と43年の2回、渋谷で生活した時期があります。2回目の原宿に居住していたとき、隣家に住んでいた女性と知り合い、後に恋愛関係となりますが、女性が既婚者であったためにその夫から告訴され、拘留・免訴という憂き目に遭いました。大正2年(1913)刊行の第一歌集『桐の花』には「哀傷篇」と題して、それまでの華やかで耽美的な作風と異なる、切実で迫力のある短歌が収録されています。「罪びとは罪びとゆゑになほいとしかなしのちらしあきらめられず」などの短歌から、白秋の苦しい立場や心境を想像することができます。

白秋が渋谷で生活した時期は、決して心穏やかなものではなかったかもしれせん。しかし後に発表された作品を見ると、白秋にとって渋谷は、自身の作品に大きな影響を与えた土地であったと考えられます。



『桐の花』(復刻)
東雲堂書店 大正2年(1913)

収蔵資料紹介

「内藤新宿千駄ヶ谷辺図」

文久2年（1862）

タテ 49.0 cm
ヨコ 53.4 cm



(部分)

今回紹介する資料は、江戸の絵図の中でも、とくに人気の高かった尾張屋板切絵図の一枚です。収録する範囲は、タイトルが示すとおり、現在の新宿区内藤町、渋谷区千駄ヶ谷一〜六丁目周辺です。

この絵図の東辺には渋谷川が描かれていますが、注目されるのは本来の水源である天龍寺の池が描かれていることです。天龍寺は現在でも同じ位置にあります。水源の池は明治に入る頃には消滅してしまいました。絵図にはもう一つの水源である玉川上水の排水路も描かれています。

これらの水路に囲まれた「内藤駿河守」と書かれた場所は、高遠藩内藤家の屋敷地で、現在の新宿御苑にあたり。一方、南方には「紀伊殿」と書かれた紀伊藩徳川家の屋敷地が描かれています。この紀伊徳川

家の屋敷地周辺は、近代以降、徳川宗家の所有地となり、明治一六年（一八八三）に亡くなった天璋院篤姫も晩年をこの中の屋敷で過ごしています。

これら大きな大名屋敷に挟まれた地域、現在の中央線沿線付近には、街路や境界線で細かく区切られた小さな屋敷が密集する地域がみられます。ここは旗本の屋敷街で、失脚後、失意のうちに晩年を送った新井白石の屋敷もこの中にありました。今でもこの街割りは残っています。

平板な屋敷の記載とは別に目をひくのが、「千駄ヶ谷八幡」と書かれた現在の鳩森八幡宮の敷地です。ここには社殿、そして現存する富士塚が立体的に描かれています。

現在の場所と比較しながら絵図を眺めると、時間のたつのを忘れそうです。

【今後の展示予定】

◆特別展 「渋谷のオリンピックと丹下健三」

令和2年1月25日（土）～3月22日（日）

建築家丹下健三の代表作「国立代々木競技場」の歴史、建築的価値、竣工の経緯などを紹介します。

◆企画展 「第20回渋谷現代短歌入選作品」

令和2年4月1日（水）～4月12日（日）

第20回渋谷現代短歌の優秀作品を展示します。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※ 10人以上の団体料金

※ 60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.4 2
令和2年1月15日発行